

滝口明祥著『太宰治ブームの系譜』

松本和也

本書は、すでに『井伏鱒二と「ちぐはぐ」な近代 漂流するアクトチュアリティ』（新曜社、二〇一三）の清新な成果によって井伏鱒二研究のスタートラインを更新した著者による、二冊めの著書である。しかも、検討対象や研究方法を前著とは異にし、その成果がすでに一書となる精力的な研究とその優れた達成には、まずもって率直な敬意を表しておきたい。

まずは『太宰治ブームの系譜』の概要・輪郭を確認するところからはじめよう。三部から成る本論を「はじめに」と終章ではさんで構成された本書は、「太宰ブーム」なる現象を、太宰治の死後から時系列に沿って、その都度のメルクマールとなる書物やトピックに照明を当てながら今日までたどりなおした、太宰治受容研究の書である、とさしあたりはいえる。

以下に、本書の目次を掲げておく。

はじめに／第一部〈太宰治〉と戦後の十五年／第一章 第一次太宰ブーム——一九四八年——／第二章 戦後の編纂者たち／第三章 戦後の若者たち／第四章 第二次太宰ブーム——一九五五年——／第二部『太宰治全集』の成立／第一章 八雲書店版『太宰治全集』／第二章 筑摩書房版『太宰治全

集』／第三章 検閲と本文／第三部 高度経済成長のなかで／第一章 〈太宰治〉と読者たち／第二章 第三次太宰ブーム——一九六七年前後——／第三章 「からっぽ」な心をかかえて／終章 その後の〈太宰治〉

「滝口明祥著『太宰治ブームの系譜』」（『日本文学』二〇一七・二）において「太宰治の死後の受容の有り様を、書名にもある三度の「ブーム」を軸としつつ追ったもの」だという要約を示す井原あやは、「取り上げられた時代は、太宰の死の年である一九四八年から高度経済成長期を経て現在に至るまで、時代ごとどのようにならぬか」と評して、研究対象・問題領域を正確にとりだしてみせた。また、「本書のアプローチはいわゆるオーソドックスな作家研究や作品研究とは大きく異なり、太宰治＝津島修治が自死した地点から始められている」ことに注意を促す若松伸哉は、「広範な射程で津島修治没後の〈太宰治〉現象を描き出す」（『週刊読書人』二〇一六・八・二六）において「本書の狙いは津島修治の死後に〈太宰治〉がベストセラー作家になっていく過程や現象を分析すること」だと措定した上で、その意義を「〈太宰治〉という現象」という観点／用語から高く評価している。あるいは、廖華娜「滝口明祥著『太宰治ブームの系譜』」（『九大日文』二〇一七・三三）においては、「目次に示されているように、滝口氏は歴史的な視座をもち、〈太宰治〉という作家イメージの形成過程及び各時代の受容状況を追跡している」ことを確認した上で、「ここで構想されているのは、太宰治個人の受容史であると同時に、戦後日本

の経済発展や政治状況が絡んだ文学史でもある」のだと、個別の作家受容研究にとどまるものではなく、本書が「文学史」なのだ」と評す。振り返ってみれば、前掲井原書評には「太宰治の受容史を追いながら、「戦後のこの国のあり方」とメディアの動きをも辿ることができる労作」、前掲若松書評には「まるで太宰治を軸とした戦後文学史の側面が示されている」と類似した評価が並んでいった。こうした比喻を招きよせる構成・叙述を本書が持つことは確かで、第一次～第三次へと至る「太宰ブーム」を縦糸に、それに編集者や評論家などのキーパーソン、全集に代表される書物、読書感想文や読書世論調査などから浮かびあがる読者（層）といった横糸が織りあわされて構成された本書が、狭義の個人作家研究はもとより、作家受容／作家イメージ形成研究の範疇に収まるものではないという理解・言表は、一様に本書の評価をおしあげてもいくだろう。

他方、その内容を、太宰治関連情報の発信者にアクセントをおいて次のようにまとめるのは、次に引く「いかにして〈太宰治〉は「流行作家」になったのか 時代によって発掘される太宰の魅力と作品の豊饒さ」（『図書新聞』二〇一六・一〇・一五）の大眞希である。

生前は一部に熱狂的な支持者がいるマイナーな作家に過ぎなかつた太宰治が、戦後になり、その死が大々的に報道され（報道する側には太宰に熱狂した者が少なかつたのではないかと滝口氏は指摘する）、太宰を高く評価していた、例えば古田晁が筑摩書房の社主となり、同じく野原一夫が編集者となり、

採算を度外視した質の高い全集を刊行し、詩人となった吉本隆明が太宰作品を「特異な転向文学」として新左翼の学生たち強い影響を与える評論を書き、成長し購買力をつけた読者たちが全集を買い求める。そのようにして、読者層を拡大していき、〈太宰治〉は現代において、現役の作家と遜色のない「流行作家」としての地位を確立している。

ここに「太宰ブーム」という観点／用語がみられないように、本書においては、おそらくは本書の急所・鍵語であるところの「ブーム」と「流行作家」という現象／言語的事件の關係が不明瞭だという瑕疵を指摘しておくことは、必ずしも本書の価値を減じるものではない。というのも、「ブーム／流行作家」といった二項をはじめとして、深く関わりながらもレベルを異にして交差する複数の要素（情報）を、「太宰治」という固有名を要としてまとめあげようというのが本書の方法であるようにみえるからだ。

ここで改めて、本書のスタートラインを確認してみよう。私が読んだ限り、「はじめに」に「太宰治といえは、生前から人気作家だったのではないか。そのような漠然としたイメージを持つている人は少なくないだろう」と書かれている一節が、本書全体が対置されるべき前提である。もつとも、この種の議論においては、仮想敵とも称すべき先行研究が、通常の意味では見当たらないことも多い。それでも、自著において研究史上の位置づけを提示しないそれは、研究書なのか一般書なのかみきわめにくい。「2016年上半期の収獲から」（『週刊読書人』二〇一六・七・二二）で本書をとりあげた石原千秋は、「マスコミに作り上げられた〇〇」

みたくないメデア論的作家論がはやった時期があつて、この本もその系譜に連なることはまちがいない」と評した上で、「この本の特徴」を「もはや太宰治文学がトータルには読まれなくなった現代を冷静に見ていること」に求めている。石原の想定と重なるのか確証はないが、すぐに想起されるのは、山本芳明『文学者はつくられる』（ひつじ書房、二〇〇二）や十重田裕一『名作』はつくられる 川端康成とその作品』（NHK出版、二〇〇九）であり、前者は研究書（専門書）、後者はNHKラジオのテキスト（一般書）である。

そうした参照体系からみれば、本書の資料の扱い方が気にはなされる。本書で参照された言説にはさまざまな種差があり、一例をあげれば研究領域ではすでにとりあげられていながら、一般には知られておらず、本書のねらいからして重要な意義を担う言表がある。そうした言表は、研究者が読めば既視感があるばかりでなく、プライオリティへの配慮があやぶまれる局面がなくもない。ただし、ていねいに手続きをふめば煩瑣になることは必定で、読み物としてのパフォーマンスは落ちる。それゆえ、本書の座標・設定・想定読者層が気になるのだ。

逆にいえば、こうしたあり方自体が本書の特徴でもあり、それゆえ可能になった問題構成や叙述も少なくなかない。「ブームや作家イメージというのは、文芸誌だけでは追いつけないところがあつて、様々な資料に分け入る必要がある」という前掲書評の井原は、

「本書が親しみやすい軽妙な語り口のせいかそうした労力さえ軽々と飛び越えているように見えるが、実際は大変な時間を要したと思われる」と、楽屋裏の著者の「努力」を漠然と浮かびあがらせているが、その際の梃子として「親しみやすい軽妙な語り」が対置されていたことは注目に値する。それと同時に、たとえば「社会思想と太宰治現象が切り結び局面が散見されるが、太宰治（津島修治）が学生時代に左翼運動に従事していた履歴を考えたとき、戦後のこのような読者のあり方と受容のされ方は重要」だと前掲若松書評が指摘する通り、時代風俗史を描きながらも、（研究史も含めて）意義深い示唆を含む局面も散見される。もとより、こうした雑多さもまた、深く関わりながらもレベルを異にして交差する複数の要素（情報）を、「太宰治」という固有名を要としてまとめるという、本書の方法の帰結には違いない。

最後に、書名に冠された「系譜」という観点／概念について、十分な論及は紙幅が許さないが、「すり消え、何度も書き直された羊皮紙に基づいて作業が進められる」「灰色のものである」ところの「系譜学」（M・フーコー）に比して、ストーリー仕立てに構成された進化的な本書（の展開）は、整序された明瞭さに満ちているが、言語化しにくい問題領域をそれとして、たちあげ、可視化したことの意義は、座標（研究史上の位置どり）ぬきにも優れた達成と評すにあまりある。

（二〇一六年六月 ひつじ書房刊 B6判 三三七頁 本体三四〇〇円）